琉球群島に於ける古賀氏の功績

（其四）

明治十七年以來古賀氏が尖閣列島に對する經營方針は單に年々或時季に際して店員及び出稼勞働者を派遣し鳥毛魚介の採集を爲すのみなりしが同二十九年九月に至り初めて尖閣列島開拓の認可を得たるを以て氏は直ちに同島に對する經營方針を確立せり

▲改良遠洋漁業船の建造　開拓認可後氏は先づ永遠の基礎を定めんが爲めに同島に永住者を送り茲に殖民的經營の畫策をなせり然れども當時本縣下一般に用ゐられたる船舶は堅牢なる琉球形式船にして到底遠洋漁業の用に堪へざるのみならず無人島開發の交通機関としては甚だ危險なるを以て氏の為を決行するに先ち勝め大阪商船株式會社に依賴して二隻の改良遠洋漁業船を建造し明治三十年其の落成するを俟ちて先づ之を八重山に送り同年三月始めて同島より出稼移民三十五名と糧食其の他一切の日用品を積載し尖閣列島へ向け出帆せしめたるが幸にして天候平穩何等の故障もなく往復二十餘日を費して同島より採集の貨物を移載して無事歸還し更に同年四月糧食其の他を積込みて派遣し翌三十一年五月結果頗る良好なるの報知を來せしを以て次回は大阪商船株式會社と協商し同會社の所有汽船須磨丸（千六百餘噸）を借入れ氏自ら移民五十名を引率し糧食日用器具各種の材料等を準備して首途に就けり

▲永住的準備　同氏今回の渡航は同島に移民計畫の基礎を確立せんとの希望なりしが故に暫時島内に滯留することゝし先づ是等移民に家屋を與へんが爲め建築に着手し井を堀鑿し原野を拓き甘藷野菜の類を栽培する等專ら航海杜絶不時の災厄に備ふる設備を整へて先づ本店に歸れり

▲交通不便及荷役の困難　斯の如く各種の事業進行するに連れて最も困難を感せしめしは同島に於ける荷役の不便、航海の不自由なる点にして同島經營の半ばは是等の障碍の爲めに其の進渉を妨げられたり

抑も尖閣列島の地形たるや海洋孤懸の島嶼にして斷崖四壁を繞らし天候少しく不穩なれば澎湃たる怒濤其の壁を打ち絶壁を港らしきものなきのみならず洋中遠く岩礁相連なり瀨を打つ浪は高く黑潮常に奔騰の速度を以て流るるが故に舟を寄するに困難を極め千六百餘噸の汽船須磨丸の如きは到底海岸に近づき得ざる故に遠く海洋の間に投錨し物貨の陸揚積込をなさざるを得ざるが故に本船は左右上下に動搖し小舟は掀顚せられて其の仕事を爲すこと能はず爲に覆沒の難に遭ふ事一再ならず一物一貨として危險を冒さざるは無く其の經營に要する材料及び糧食等を輸送するの困難心痛は實に言語の外にありといふ

1910-1-6
(2) 沖毎

1910年01月06日